

9月



# 川系男子の『川と人』めぐり No. 27～阿賀（野）川～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

うさぎ うさぎ 何見てはねる  
十五夜お月さま 見てはねる

（唱歌『うさぎ』 作詞・作曲：不詳）



図1 阿賀（野）川流域図（国土交通省 阿賀野川流域図をもとに筆者作成）

## 1. 夏の終わりの阿賀川

会津若松駅に降り立つと、白虎隊の銅像が勇ましく建っていた。白虎隊が勇ましく散った会津の地には阿賀川が流れている。2014年8月29日～30日にかけて阿賀川をめぐった。阿賀川は阿賀野川の福島県側の呼称で、地元では「アガガワ」と呼ぶ以外に

「アカガワ」とも呼んだり大川とも呼ばれたりしている。（新潟県側では主に阿賀野川と呼ばれており、河川管理上の水系名も阿賀野川が用いられている。）今回は福島県の阿賀野川すなわち、阿賀川に絞って周った（図1）。



図2 大川ダム堤体とダム湖

阿賀野川は栃木県と福島県の県境の荒海山に源を發し、猪苗代湖から流れる日橋川、尾瀬ヶ原から流れる只見川の水を集め、会津盆地を貫流して、越後平野（阿賀野川）へと入り、西流して日本海へ注ぐ。河川の規模は流域面積 7,710 km<sup>2</sup>、幹川流路延長は 210 km である。阿賀川（福島県側）が流域面積 3,260 km<sup>2</sup>、幹線流路延長 123 km と大半を占める。流域の降雨特性は大きく 3 つに分類でき、会津地方は「梅雨期から台風期に降雨が集中、只見地方は「典型的な豪雪地、梅雨末期に多雨」、越後平野は「多雨多湿で北陸特有の気候」である。その点をもても、水量の豊富な川であることがうかがえる。阿賀川の地名の由来をもても、仏教用語『閻伽』（アカ、水の意味）が変化したもので水量の豊富なことを意味している。夏の終わりを嘔みしめるため、阿賀川を一人巡った。

## 2. 大川ダムと桑原集落

阿賀川を会津若松市内から遡り、大川ダム（図2）を見学。ダムまで上がっていく途中には、温泉地として有名な芦ノ牧温泉があり、ダム上流には湯野上温泉などがある。

大川ダムは重力式コンクリート・フィル複合ダムで、堤高 75m、堤頂長 406.5m、総貯水量 5,750 万 m<sup>3</sup> の国土交通省管理の多目的ダム（F：洪水調節、N；不特定用水、A：灌漑用水、W：水道用水、I：工業用水、P：発電用水）である。本体着工 1979 年で、竣工は 1987 年である。自身の生まれた年と同じ（9 月にはともに 27 歳となる。）と思うと親しみが湧く。

このダムは世界初の RCD 工法を実施したダムで、基礎部をこれにより完成させた。RCD 工法とは、超固練りコンクリート（スランプ 0cm）をダンプトラック、ブルドーザー等の一般土工機械により連続大量打設を行うものである。これにより工期の短縮と工費を低減できる。

大川ダムの天端からダム湖を眺めた印象は奥行き感のあるダム湖。湛水していても少し川幅の大きなダムといったような感じで、よく見るダムのように

ダム湖の全体像が一望できるような幅広さはない。しかしながら、貯水量が 5,750 万 m<sup>3</sup> あることから河川の湛水区間が長いと推察される。ダムの放流口から流れ落ちる水流は勢いよく下流へと流れていた。

ダムを見学した後、ダム湖から付け替え道の広い道に上がるため、高台にあがる道の途中、道の片隅にひっそりと建つ碑を見つけた。なんとなく気になったので車を止めた。そこにはこんなことが記されていた。

### 桑原集落移転記念

我々は国家的大事業である大川ダム建設にともない、この碑の下方にあり湖底となった地よりこの高台に移転した

我が集落はかつて徳川幕府の天領であり参勤交代の宿場として繁栄をみたこともありまた会津三方道路の要衝でもあった

今 昔日を偲べば鎮守の森 平掘りの洞門田 国鉄の桑原駅 その他 湖底に沈みし一切に懐古の情を禁じ得ない

我々はここにダムの完成を機に記念の碑を建立して祖先が嘗々として培った郷土愛を発揮し一致協力して再建の途に就くべく集落の安全と発展を記念する

昭和六十三年三月

なんと悲しく、切ない文章なのだろう。水底に沈んでしまった郷土に対し、回想を巡らせさまざまな想いを馳せる。それでも新しく移転した場所で前向きに生きていこうとする強い意志。

ダムは我々の豊かな生活を維持・発展していくために必要なものである。下流に住む人々を洪水から守り、田畑に十分に作物がつけられるだけの水で土地を潤し、家での食事、洗濯、風呂など文化的な生活を営むだけの十分な水を供給し、工場の製品づくりに必要な水、電気を十分につくりだすための水などをできるだけ過不足なく送り続けてくれ、安定した生活ができる素晴らしい機能を持っている。出来上がったダムは構造物としても大変立派なものであり、日本の土木技術の粋を集め、山の中に堂々と建ち尽くしている。

しかしながら一部の人々の生活を変えてしまうのも忘れてはいけない事実である。ダム建設の賛否云々は議論するつもりはないが、ダムが小さな集落の生活を壊し、河川を分断するという事は事実なのである。多々の犠牲の上に我々の豊かな生活が担保されている。我々はそれらから得られる恩恵に対し常に感謝を忘れてはならない。用地屋さんとしてダム現場で長年仕事をしてきた古賀邦雄さんの言葉を借りればだからこそ「補償の精神」が重要である。大川ダムの底に沈んでしまった桑原集落に住んでいた人々が新しい地で幸せに生活を育んでいることを切に願う。



図3 水位低下している宮川ダムのダム湖



図5 湛水区間の連続する只見川



図4 博士峠登り口（対岸には宮川ダム）

### 3. 博士峠を越えて

大川ダムを一旦下り、只見方面へ移動する。只見方面に向かうため、宮川を遡り、峠道に差し掛かる。峠の登り口には宮川ダムという農業用の小さなダムがある。水はほとんどたまっていない(図3)。長い間、高い水位を保てていないのか、ダム湖の両岸には草が茂っている。

ふと周囲の看板に目をやると、「博士峠」(図4)と書いてある。国道401号線(会津若松市～沼田市)であり、道が貫通する昭和村にとっても重要な道路である。博士峠の名称は周囲の博士山からきている。博士山の由来については諸説ある。博士山(1,482m)は「佩かせ」の意味で神々が太刀を佩いて峰伝いに通ったことに由来するとも言われている。この博士山で会津盆地を発見した神々は、豪族達の動きを目に凝らしながら盆地を直下に見下ろす明神ヶ岳へと降りていく(古事記より)。また、博識の僧があらゆる学問に秀でて物知り博士であったことなど説がある。博士課程に身を置く者としては何としても越えてみたい道である。現れた峠道に対し、気合を入れて上った。

博士峠は前に誰も走っていなかった。暗いトンネルに入り、ひたすら進む。急カーブで方向転換の連

続で、険しい道が続く。狭き道で、突如前から現れた大きな壁(車)にぶつかりそうになる。いつ抜けるか分からない孤独と不安と戦いながら上りつめていく。登っていくと視界が開ける瞬間や、道沿いのブナ林の緑に心休まる瞬間もある。そんな博士峠を無事に越えることができた。

早く自身の博士峠も越えていきたい。

### 4. ダムの連続する只見川

博士峠を抜けて只見川沿いに出た時には辺りは暗くなり始めていた。最上流端の奥只見ダムには到底行けそうにないので、宮下ダムから川沿いに下った。

只見川沿いには多数のダムがあり、上流から順に奥只見ダム、大鳥ダム、子子倉ダム、只見ダム、滝ダム、本名ダム、上田ダム、宮下ダム、柳津ダム、片門ダムと只見川本川145kmの間に連続して10か所もダムがある。確かに只見川を下っている際には川は湛水区間ばかりでダム湖であるという印象だった

(図5)。これらのダムは全て利水専用ダムで、洪水調節をしない。「しない」というのがポイントで、原理上できない訳ではない。要は利水ポケットが空いていて、流入量>放流量となれば利水専用ダムであっても治水効果を発揮したことになる。しかし、利水専用ダムはあくまで利水のためのダムであり、制度上洪水調節を行うことはできない。利水専用ダムが行う操作としては流入量=放流量を出すことであり、流入量<放流量とならないようにするためダムがあってもなくても下流の水位は変わらないのが原則である。ダムがあったから水害が大きくなったという論調・論理も見かけるがそこはダム操作を把握した上で正しく見極める必要がある。

只見線と只見川の写真を撮る人が愛する風景を自身もカメラに収めたかったが、どうやら気が付かない間に通過してしまったようなので、またの機会に訪問することにした。

夜、会津若松市内に戻る。出張で来ていた島根大の佐藤先生と合流し、研究の話や巡った川の話、川のあり方についてなど、意見をぶつけあった。普段





図7 十六橋水門



図9 『川に近づくな』の看板(高橋川)

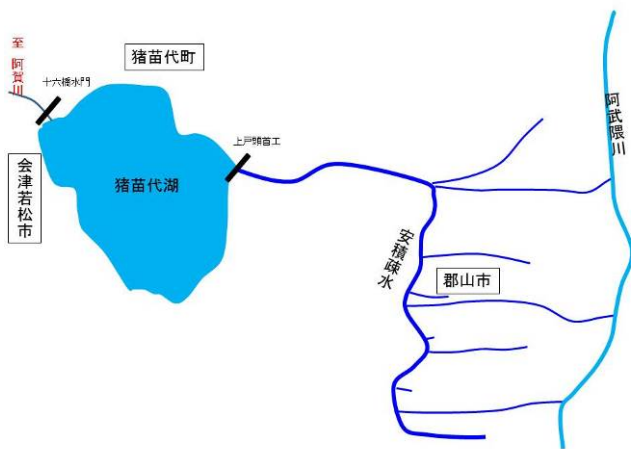


図8 猪苗代湖と安積疎水(筆者作成)

壮観な水門が連続している。この水門をつくることで、流出する日橋川の水位の調節、猪苗代湖の水位を調整する目的でつくられた。これは郡山側に猪苗代湖から水を引く安積疎水の事業と大きく関係している。ここには安積疎水の建設を指示した明治のお雇いオランダ人技師、ファン・ドールンが指揮したもので、安積疎水工事は十六橋づくりから始まった。十六橋の手前に大きなファン・ドールン像が建設されている。この立派な像にはエピソードがあり、第二次世界大戦中、原料供給のため、銅像が供出されていた。しかし、初代安積疎水土地改良区理事長であった渡辺信任の指示により、地元住民は「銅像は盗まれた」という口実で口を合わせ、銅像を隠した。戦時中に、敵国であるオランダ人の銅像を大切にしたのはファン・ドールンが工事の功労者として地元で大いに感謝され、尊敬されていたからであろう。この十六橋のところ取水用途として、灌漑用水(土地改良区)、発電用水(東京電力)、上水道(会津若松市)、浄化及び修景用水(会津若松市)となっており、修景用水という初めて聞く用途であった。

次に安積疎水への流出口である上戸頭首工を見学。ここから猪苗代湖の水は疎水として安積地方へと流れていく。もともと安積地方は水が多くなく、荒涼

とした不毛の土地であった。そんな安積地方を農業地帯へと変えたのがこの安積疎水だった(図8)。目地政府の直轄事業第一号として始まった。3年の年月を費やし、延べ85万人の労働力を注ぎ、総経費40万7千円(現在の400億円)を当時、幹線水路延長52km、分水路78km、トンネル37か所、受益面積3千ヘクタールという大きな疎水事業が完成した。

現在も郡山市は水道や農業用水をはじめとし、安積疎水の恩恵を受けている。猪苗代湖が一望できる昭和の森公園に連れて行ってもらい、後にした。

#### 7. おまけ - 「川にちがづくな」看板-

先生宅に行く途中、高橋川を渡った。小さな川幅の緩傾斜で水際まで降りやすく子供が遊ぶにも最適な川である。しかしながら、橋のところにはでかかた PTA による「川でちがづくな！」の看板がある(図9)。かなりのインパクトだったが、PTA にとって川は危ないところという認識のようだ。強烈なインパクトがあったのでここに付記しておく。

#### 8. 夏の終わり

夏の終わりの一人旅を終え、阿賀川を後にした。治水、利水ともに面白い要素のある川であり、また再訪したい。夏の終わりはいつも切ない。今年の夏の川めぐりの総括にふさわしい一人川旅であった。

#### 【筆者について】

坂本 貴啓(さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りテレビに映る川がどこの川か当てること。